

路となる

熊本午後一時十五分、八二八キロ。大津所阿蘇見送り茶屋に午後一時三十分到着、ここでおいしい昼飯をいれた。一路阿蘇を目指し、速攻をばやめる。

一ノ宮に着いたのが午後三時五分、行程一三〇キロ。ここには昭和十一年に訪れたことがある。阿蘇と素通りするのには惜しいが、時間都合で他日に調査せねばと事と急がせ、瀬の本、牧ノ戸、由布院、別府、大分、と益田先生の速報は、実に正確に事故なく、弥生町に降りついたのが午後七時二十四分。今日一日の行程二九三キロ、第一日と合すると、実に五五七キロとなる。

弥生町教育委員会として、県外研僑ははじめて、家に良の勉強に打つたと思う。これと糧として所内にある文化財の調査と保存に益々努力を致したいと思う。この雑文が佐伯史談会へ皆さんの御参考、お役に立てば幸いである。(以上)

探訪記

大分市 狭間地区をめぐる

—— 四月定例研僑会の記録 ——

会員 河野 典 一

二月二十日、予定であった定例研僑会は、伊勢神宮御神楽展の最終日、混雑を避けてこれを繰上げ、四月十三日(日曜)急遽実施に変更し、午前八時十分、バスと七時四十分の汽車とで自由に大分に集合した。快晴温暖な天候に恵まれ、探訪日和である。大分バスターミナルには今日御祭祭下される渡辺克己、藤井幸良の両氏が先着されていて、却って私共が迎えられた。立川先生が御案内になるマイクロバスは、既に改札口で乗車を待っている。九時十分発車、外環通りから中央河を西進、大道通りで左折、新しく完成した大道陸道を抜ける。夜線になったこの陸道は昔の面影は全くなく、モダンな名刺の大きい見事な出来栄にやぶく。

大分が定着したと説明をきく。後刻見る國分寺に對し、この地に國分尼寺があったと云われる。永興の中心、三十四町から道は分れて古折西進、狭間地区に向ふ。「イホ」の女おる言伝えの語も伺う。賀束川と左に異道と少し進めば、民家の後方に丑殿古墳がある。丑殿古墳は異指定史跡で横穴式石室、石表は幾分片出されたりしく、附近の民家に大きな平石があるのが見える。古墳入口は小石仏三四体と、其の前方に古くは小庵の棟が残っている。すぐ近くは民家裏に、五米位の板碑二基と、丑輪落一基がある。何れも鎌倉期らしいとの事であるが、年次が古い力が惜しまれる。それから一キロほど西進して宮苑部落に入ると、河岸段丘上に千代丸古墳がある。横穴式で、天井、横壁、床と、いすれも切り石で畳み、その壁には人と馬の彫刻と彫彫の仏像が幽かに見える。朱色の着地も歴然として見事な装飾古墳である。入口前より新しい水造門から石室へ入口まで約三米位は天井をけなく横壁と歩道は切石で几帳面に敷きつめられ九ノ目、何時の時代にか天井は地人が斜めとったことと察せられる。前方から古墳の頭部屋根の部分を見れば、其の形状からして、前方後円墳であると意見が一致した。此の千代丸古墳は大正九年秋、中津地方で行われた陸軍特別大演習に際し、大分地方に未だ一士官によって発見されたといふことである。

それから陸を引き返し賀束を経て南方國分に向かう。南方はるかに雲山(リヨウ山)と云ふ山を望見する。時分が足りないので賀束神社で下車し者略して車中で説明をきく。賀束神社は、前記の神社、祭神日四代天皇に任じ、

百歳を保つたという武内宿禰である。主君三代の帝を以る柀
宗八幡宮か。二年の内、秋十一日、お出仕せよ」と仰せ、明か
え十一日、お出仕せよ。後、柀宗奉命を命せられたと早念、十一
十一日、お出仕せよ。後、柀宗奉命を命せられたと早念、十一
十一日、お出仕せよ。後、柀宗奉命を命せられたと早念、十一
十一日、お出仕せよ。後、柀宗奉命を命せられたと早念、十一
十一日、お出仕せよ。後、柀宗奉命を命せられたと早念、十一

賀来、南一、五キロ、大分川と九水線にばさまれた地、
が国分である。国分寺跡前で車を降りて寺内に入る。

入口の右側に「豊後州」左側に「国分寺」と頑丈な石
柱、標識が建っている。正式の寺号は「医王山光明寺」
と云う。金光明経の怒名から生まれ左寺号であるとの
説明である。天平十三年、聖武天皇の勅願によつて建立せ
られた河山は行基菩薩と伝えられている。

(注) 行基菩薩は奈良朝法相の僧、我が国大僧正の初まりの人、天
平十二年、政後、善達寺を賜わ。道隆を湖上橋を架け、湖池を作
る等の徳業を全国に行つた第一者、日月天の神高塚地蔵尊
へ本尊は天平十二年、行基が刻んだ。行基は其の頃、勅命によつて
筑紫に下つた寺伝にある。

国分寺跡は昭和八年史跡として国から指定された。境
内に入つて金堂趾に行く、方四間の立派な造りが盛時と
認めせる。本尊は鎌倉期の作と云う。兼師如未像である。
こゝで説明は高松燮英師に代わる。床下の大きな礎石が
眼につく。礎石は境内にまだ何個も残っている由である。
金堂趾の後方に宝篋印塔二基、小石佛五尊が並ぶ、其
の奥に等身大の石佛の立像、坐像二十三軀と算えるが、
その何れであるかは確める時間がない。其の奥に、文余も
あると見られる地蔵菩薩像(銅像)がある。台座四周に
銘文をめぐらしてあるが、これに読む時向がなく、僅か
に最後の製作年次「明和九年」と読まれている。

大友島津の兵隊に、主要建物を焼かれて僅かに残つた
この国分寺も、この銅像の寄進建立と見るとき、明和の

頃才を相当の信仰を集めて居たことかうなつける。銘文
の文字は何千字にも垂んとする程の細字の集合であり、
経文ではないかと思われ、古か證、以後日に譲りたい。

銅像の南側に菩薩像の観音像が残り、聖観音立像を安
置している。これは木像で丈余の見事な出来栄であるが、何
時、頭下か表面を塗りかえて、技法も木目を塗り潰しているが、惜
しまれるといわれる。左側に並んで約二米ほどの十一面観世音菩薩
の立像がある。藤原時代イ作と説明される。

国分寺の境内は現在でも面積が何畝かというほど、
泉公家としてお勤めの住職の住宅が、観音堂の南側にあり、へ寺
は天台宗に属するも檀家なく、庫裡と云うより、タダの近代住
宅(観音堂)も、高松住職は住宅前の道路上より、其の南を
約百五十米ほどの辺を指して、昔南大門のあつた位
置だと説明下される。盛時に如何に寺域が宏大であ
つたかを窺うことが出来る。

高松住職から諸せらるるままに、一行は住宅の縁に勝
とあつてお茶の接待を受けた。今日は二十段を越える
気温、汗ばみで脱いで上着を脱ぐほどである。一杯のお
茶は酒類とうるおし流石と驚かす。

千二百二十八年前、奈良朝時代仏教興隆につくされた
帝、造寺造塔の帝四十五代聖武天皇と南山行基菩薩とを
思ひおこして、感慨にふけつたのは、一人ではあるまい。
住職から冬将骨名簿に晋名と、求められる。高木会長以
下佐伯史談会一行十七名順々に署名した。

時向に迫られて、正午国分寺と出発、末左道を大分に寄り
トキワ着、晝食後、伊勢神宮御神宝殿に入り、御神宝百数
十点を一時向半にあつて念入りに刮目して拝観し、後こゝで
解散し、それ、帰途についた。

(おまひ)
当日、バスに同乗、而も説明の傍を煩わす。濱田克己先生の
多量の心づかぬお話を聞いて、御説明も、バスの多量なほど、車
中の部分年托も充分で、貴重なたとえ、貴族の個性が出来る
お話を聞いてお喜び申し上げます。